

沖縄アイデンティティー 上

海外ウチナンチュから見る復帰50年

ノンフィクション作家 三山 喬

民族の祭典——こう言うと、ナチス時代のベルリン五輪映画の邦題と重なってしまうのだが、明治以来沖縄から世界に散った移民の末裔が、五年ごとに「父祖の地」に参集する「世界のウチナンチュ大会」は、ルーツを同じくする同胞が世界規模で紐帯を確かめ合う、まさにそんな趣のフェスティバルだ。

マイノリティならではの自負心

自分たちはみな等しくウチナンチュである——。シンプルにその一点で、国内外一万人前後もの大会参加者が歓喜に酔いしれる。とくに野球場でのファイナーレには高揚感が満ちあふれ、私のような部外者のヤマ

トンチュまでもが興奮の渦に呑み込まれそうになる。

県外ではイメージしにくい情感だし、国レベルで「同じ絵」を想像してみると、「国粹的・全体主義的な熱狂」になりかねない危うさにも気づかされる。ただこの祭典においては、「選ばれた民」が威風を誇る空気がなく、むしろ小さな島に出自ルーツを持つ仲間同士、どれほど歴史に翻弄されようとも、父祖伝来の心根を失うまいとする「マイノリティならではの自負心」が伝わってくる。

コロナ禍で延期され、六年ぶりの開催となった第七回大会は昨年十月三十一日から四日間の日程で那覇市を会場に開かれた。私は前回大会に引き続き、現地でのその空気を体感した。

今回は「水際対策」の解除がギリギリまで遅れ、「オンライン参加」の受け皿も作ったため、海外から実際に来県した参加者は計二十一の国と地域から二〇〇〇人余り。過去六大会、右肩上がり規模を拡大し前回約七三〇〇人の訪日を記録したことを考えると、リアル参加者は大幅に減少したわけだが、それでも地元沖縄の人々も数多く参集して、いずれのイベント会場も過去に劣らない熱気に満ちていた。

十月三十日の午後。那覇市の目抜き通り・国際通りでは、参加者が国別に行進する「前夜祭パレード」が行われた。沿道を埋め尽くす人垣から「おかえり」「ウエルカムバック」などと絶え間なく声援が飛ぶなかで、揃いのシャツ、あるいは民族衣装などを身に着けた人々が満面の笑顔で練り歩く。

私が旧友を見つけたのは、ドラム隊が激しくサンバのリズムを打ち鳴らすブラジル勢の隊列だ。前年暮れ、移民世代の高齢化で廃刊した現地日系紙『ニッケイ新聞』の編集長だった深沢正雪氏。現在は『ブラジル日報』というNPOが発行する媒体で、両国の情報を双方向に発信する新機軸の二カ国語メディアのあり方を模索している。

彼のことは、本誌の連載を二〇〇八年に書籍化した『日本から一番遠いニッポン』（東海教育研究所）でも取り上げた。初めて会ったのは三十年ほど前、年齢は私の方が四つ上になる。

当時の私は朝日新聞記者として、ドミニカ移民問題（戦後、過剰人口対策でカリブの国・ドミニカ共和国に送られた日本人移民が、砂漠のような農業不適地への入植を強いられ困窮し、国家賠償請求訴訟につながった出来事）を取材、他のラテンアメリカ諸国への日本人移民史にも興味を膨らませていた。かたや深沢氏は、ドミニカ移民調査団長を務めた移民研究者で三重大学教授だった故・今野敏彦氏（のちに東海大学教授）の教え子だった関係で『ニッケイ新聞』の前身『パウリスタ新聞』の研修記者となり、ブラジルへの移住に踏み切ろうとしていた。

何年かの一時帰国以外、ほぼ一貫して現地で生活する深沢氏には及ぶべくもないのだが、私もその後朝日を辞め、ペルーの日系紙『ペルー新報』で働くなど約六年間、南米の日系社会に身を置いた。

つまり私たちは平成以後の取材者では、移民や日系人をそれなりに深く知る立場にいるのだが、それでも他の日系人と比較して「沖縄県系人」（沖縄では地元